

# 公共図書館での交流活動が初等教員養成課程の 学生の学びにもたらす効果

青木 聡子

## 1. 問題と目的

筆者の研究室では、2023年に世田谷区立世田谷図書館(以下、世田谷図書館)より子どもサービス運営への協力・参画の提案を受けたことを機に共同事業を進めてきた。その主な目的は、(1)学生による提案と実践協力によって、公共図書館の子どもサービス運営の改善と新しい展開をはかること、(2)本学における履修と研究の成果に役立てること、(3)地元大学の地域貢献について、多くの人々への理解を広げていくことの3点である。本稿では、2023年度に行われた、(1)児童書の選書をテーマにした図書館員と学生との意見交換、(2)読み聞かせ行事への協力参加と区民ボランティアとの交流、(3)地域の保育園に通う幼児との「おはなしのへや」の壁面製作活動を取り上げ、初等教員養成課程の学生が公共図書館で交流活動を行う意義について論じることとする。

本学の初等教育コースは、幼稚園及び小学校の教員養成課程である。大学4年次に教育実習が行われ、それ以前に授業で幼稚園や小学校の現場に行く機会は、各担当教員に委ねられていて、カリキュラムに明確に位置付けられているわけではない。定員40名の学生のうち、例年、10数名～20名弱が幼稚園教諭の教員免許状を取得し、ほぼ全員が小学校教諭の免許状を取得する本コースでは、その多くが小学校教員を目指しており、学童保育でのアルバイトや小学校での教育ボランティア、学習塾でのアルバイト等を通じて子ども達と日常的に関わっている学生も少なくない。一方で、幼稚園への就職を目指す学生は1学年当たり数名程度ということもあり、模擬保育や生活科の模擬授業を行う際に、幼児や低学年児童の姿をイメージすることが難しい、という声がしばしば聞かれる。このような状況にあって、実際に幼児と関わる場を持てることは、幼児理解を深める貴重な機会となる。

では、幼稚園や小学校ではなく、公共図書館で活動する意義とは、何であろうか。『幼稚園教育要領解説(平成30年2月)』(文部科学省,2018b)を見てみると、身近な環境との関わりに関する領域「環境」の内容「(11)生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」には、公共の施設の例として図書館が挙げられている。そして、「公共の施設などを利用する際は、幼児の生活に関わりが深く、幼児が興味や関心をもてるような施設を選択したり、訪問の仕方を工夫したりする必要がある。その際、このような施設が皆のものであり、大切に利用しなければならないことを指導することにより、公共心の芽生えを培っていくことも大切である。」と、述べられている。

また、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編 平成29年7月』の総則には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のために、各教科の指導に当たって、地域の図書館等の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実することに配慮するよう記されている(文部科学省,2018a)。特に、生活科においては、生活の場を家庭から身近な社会へと広げたり、豊かにしたりすることにつながる、公共物や公共施設の利用の学習があり、その例の一つとして、図書館の本や図書館が挙げられている(文部科学省,2018a)。無論、小学校も公共施設の一つであり、校内にも図書館があるが、学校図書館を利用するのは、その学校に在籍する児童や教職員に限られる場合が殆どで、自分とは立場の異なるいろいろな人と一緒に利用するという感覚は生じにくい。よって、公共図書館は、児童が学校図書館と比較しながら公共物や公共施設の利用について学ぶのにとっての学習対象であり、教材研究の上でも多くの学びが期待できる。

例えば、IFLA-UNESCO 公共図書館宣言2022には、公共図書館の使命の一つとして「生まれてから大人になるまで、子供たちの読書習慣を育成し、それを強化する。」ことが明記されている(長倉ほか,2025)。実際、図書館員は、公立図書館には「子どもの本との出会い」を支え「読書の楽しみを伝える」こと、

「子どもの読書活動の推進」や「子どもの読書環境の整備」だけでなく、「親子への支援」、「学びの場」や「子どもの居場所」づくり、「子どもの成長」を促す役割や意義があると考えて日々の業務に当たっていることが報告されている（八幡，2025）。よって、図書館での交流活動を通じて、こうした施設を支える人々の工夫や気持ちに気付くことができれば、自分が保育や授業をする際に子どもに気付いて欲しいことを整理したり、そのために必要な援助・支援について具体的に考えたりすることができるようになると考えられる。

また、本事業では、世田谷図書館からの依頼を受け、「おはなしのへや」の壁面を幼児と共に装飾する活動も行った。加藤（2018）が指摘するように、保育者は、自らが選択するデザインのの一つ一つが物的環境として子ども達に影響を及ぼしていることを理解し、意図を持ってデザインを選択する必要がある。幼稚園教員や保育士の半数以上が壁面製作を教育的な働きかけの一つとして捉え、「子どもの想像力をかきたてるような要素を入れる」ことや「教師の手による装飾の一部に、子どもの作品を取り入れる」ことを重視している（幡野・山根・小田倉，2009）ことからわかるように、壁面は重要な保育環境の一つである。

一方で、保育現場には、色・形・機能といった具体的な要素がもたらす効果を壁面装飾に取り入れるだけの時間的・経済的余裕が十分ではないという現実的な問題があり、（1）容易に（2）安価で（3）見た目の良いかわいらしい壁面に仕上がる、既存の保育雑誌等のイラストが多く採用されている。教員養成にあたっては、単に画一的なイラストで壁面を装飾・構成する力が保育スキルとして定着してしまわないよう、壁面製作の意義についても学生に伝えていく必要がある（以上、幡野ほか，2009）ことを踏まえ、本研究では、壁面全体のデザインの原案も学生達で作成することとした。

以上のことから、本研究では、公共図書館での交流活動が初等教員を目指す学生の学びにもたらす効果を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 研究協力者

筆者が担当する、「卒業研究Ⅰ（幼児教育・生活）」を履修している3年生3名及び、「卒業研究Ⅱ（幼児教育・生活）」を履修している4年生1名。学生は、幼稚園教員免許や小学校教員免許に関わる科目を履修しており、幼稚園や小学校の教員を目指している。

### 2.2 倫理的配慮

学生に対して口頭で研究の趣旨を説明し、協力を求めた。その際、個人名は伏せること、研究への協力は任意であり、授業等で利益・不利益が発生するものではないことを説明し、同意を得た。

### 2.3 交流活動の概要

#### (1) 児童書の選書をテーマにした図書館員と学生との意見交換

日 時：10月31日（火）13:00～15:00

場 所：世田谷図書館（多目的室）

参加者：図書館員3名（講師（世田谷区立中央図書館図書館事業推進担当）1名を含む。）、学生4名、教員（筆者）1名。

#### (2) 地域の保育園に通う幼児との「おはなしのへや」の壁面製作活動

日 時：12月1日（金）11:00～12:15

場 所：世田谷図書館（おはなしのへや、および、多目的室）

参加者：保育園児（4・5歳児クラス）18名、保育士3名、図書館員5名、学生4名、教員（筆者）1名。

#### (3) 読み聞かせ行事への協力参加と区民ボランティアとの交流

日 時：12月15日（金）10:30～11:00

場 所：世田谷図書館（おはなしのへや）

参加者：大人10名，子ども9名，区民ボランティア（おはなしボランティア）2名，図書館員2名，学生3名，教員（筆者）1名。

概 要：毎月，第3金曜日に区民ボランティアによって行われている「あかちゃんおはなし会」で3年生3名が大型絵本の読み聞かせと手遊びを行った。会の最後には，12月1日に作成したせたがやのまちの壁面製作に，図書館員が用意した折り紙の木を貼る活動を行った。当日のプログラムは，次の通りである。

- ①『ととけっこうよがあけた』（手遊び，絵本）（案：こばやしえみこ／絵：ましませつこ，2005年，こぐま社）
- ②『つん こん ぱっ』（絵本）（絵・作：こべんなな，2018年，福音館書店）
- ③『わんわんわんわん』（大型絵本）（作：高島 純，2020年，理論社）※学生が担当。
- ④『リンゴごろごろ』（手遊び）※学生が担当。
- ⑤『うまはとしとし』（わらべうた）
- ⑥『ゆうらりゆうらり』（わらべうた）
- ⑦『くまのおでかけ』（小道具を用いた語り。雪だるまバージョン。）
- ⑧『ろうそくぱっ』（絵本）（作：みなみじゅんこ，2017年，アリス館）  
『ろうそくぱっ』（手遊び）
- ⑨『すやすやおやすみ』（絵本）（文：石津ちひろ／絵：酒井 駒子，2021年，福音館書店）
- ⑩『さよならあんころもち』（手遊び）

## 2.4 分析対象

本稿では，各交流活動の終了後に学生が書いた振り返りのショートレポートと活動の記録を分析対象とする。

## 3. 結果と考察

### 3.1 児童書の選書をテーマにした図書館員と学生との意見交換

3年生3名のうち2名は，次年度に幼稚園での教育実習があり，幼児の前での読み聞かせを控えていた。残り1名は，同じ時期に小学校で教育実習を行うことになっていた。また，4年生1名は，既に教育実習を終え，小学校教員を目指していた。いずれも，近い将来，学校園の学級の本棚の選書を行うことになる学生であることを踏まえ，筆者からは，予め，図書館側に，読み聞かせに限らず，幼児，あるいは，低学年児童のための本棚の作り方や図書との出会い作りの工夫について取り上げてほしい旨を伝えた。

表1は，児童書の選書をテーマにした図書館員との意見交換についての学生の感想である。学生Aは，これまでも子ども達を前に読み聞かせをした経験があるものの，選書については，これでよいのかと自信を持てずにいるところがあった。だが，講義を受けたことで，インターネットの口コミや出版社のサイトを見て選ぶだけでなく，図書館に足を運んで専門家が選んだ本の中から，実際に手に取って選ぶことの重要性に気付くことができた（下線①，②）。

学生Bは，本好きが高じて図書委員をしていた経験があり，幼い頃から学校の図書室や公共図書館に行く機会も多かったが，公共図書館の司書の仕事の奥深さについては，初めて知ることばかりだったようである（下線③，④，⑤）。

学生Cは，普段から，目の前の絵本について熱心に教材研究し，どうすればその絵本の魅力が子ども達に伝わるかを考えて，読み方を工夫しようと心掛けている。そして，今回，図書館の内容別蔵書構成について知ることができたことで，将来，自身が幼稚園に学級文庫を設ける際も，意図的・計画的に図書を揃えていく必要があることに気付くことができた（下線⑥，⑦）。



### 3.2 地域の保育園に通う幼児との「おはなしのへや」の壁面製作活動

学生は、製作活動の模擬保育の経験こそあったものの、背景から作り込む壁面製作を行うは初めてであった。当日の活動場所でもある「おはなしのへや」の下見をしてからデザインの検討を行った結果、地域の子ども達が利用する「おはなしのへや」の壁面製作であることを踏まえ、おはなしの世界と世田谷図書館とをつなぐような壁面にしたいと、近隣の商店や世田谷線をモチーフに、せたがやのまちをイメージした原案となった（図1）。そして、背景となる、木や世田谷線、図書館などは予め学生が作り、ゆくゆくは、子ども達に、あったらすてきだと思ふ家やお店を描いて貼り足してもらおうことを計画した。

筆者は、冬の落葉樹のように幹と枝だけの木にするのであれば、枝がある程度張り出していた方が、製作物を飾り付けるのにバランスをとりやすいこと、花や実のイメージで葉っぱも土台とする方法もあることを伝えた。また、幹や枝はデフォルメしてシンプルなデザインにする方法もあること、枝を多めに張り出せば、葉はなくてもよいことを伝え、活動当日の参加予定人数を踏まえ、20作品以上を飾ることができるようなデザインとなるようにした。



図1 学生が黒板に描いた壁面製作の原案

子ども達との壁面製作は、ねらいを「雪の結晶のイメージをいろいろな素材で表現することを楽しむ。」。内容を「毛糸やモールを使って、巻き方やどんな模様の雪の結晶を作りたいか考えながら、自分のお気に入りの結晶を作ることを楽しむ。」。主な活動を「毛糸やモールを使った雪の結晶作り」とした。

当日は、導入として学生達が『きらきら』（文：谷川俊太郎、写真：吉田六郎、2008年、アリス館）を読み聞かせた後、子どもたちに、切り込みを入れた一辺約8cmの六角形の厚紙に、毛糸やビーズを通したモールを巻き付けて雪の結晶を作ってもらい、出来上がったものを幹と枝だけの木に装飾した。

活動の終了後は、学生達に、壁面（表2）、および、製作活動（表3）について、よかったところと改善点をショートレポートにまとめるよう求めた。

壁面については、おはなしのへやをおはなしの世界と世田谷図書館とをつなぐような空間にしたいと、近隣の商店や世田谷線をモチーフにしたデザインにした意図が子どもたちに伝わり、「世田谷線だ!」「知ってる!」などの好意的な反応が得られことが、学生達の達成感につながった様子だった（表2）。一方で、せっかく活動に参加してくれた子ども達の保育園を連想させるような建物がなく、子ども達をがっかりさせてしまったことが反省点として挙げられ、後日、追加する対応をとった。

限られた時間の中で、見通しを持って計画的に教材研究や活動準備を進めることの重要性について気付けたことも収穫であった。教員養成系の学生は常に課題に追われていることや大学教員の力量不足もあり、ともすれば、単位取得のためだけに課題をこなすような姿も見られるなかで、今回のような園児との共同製作活動は、教員を目指す者として、子ども達に楽しんで活動に取り組んでもらいたいという原点に立ち返ることができるよい機会となった（表3）。

表2 壁面製作についての振り返り

<p>壁面は色の系統を合わせようとしたので見栄えが良かったです。ただサイズが全く合わなかったのでサイズをちゃんと直線をとるようにしないといけないと感じました。あとは保育園を作らなかったのは盲点でした。学校でやっていく準備をもう少しやりきってからやらないといけないと思いました。(学生A)</p>
<p>保育園や幼稚園を入れて、もう少し子どもたちに身近な建物を取り入れるべきだった。また、世田谷線に色をつけて、バスや車の数を増やしたほうがよかったかなと感じた。(学生B)</p>
<p>〈よかったところ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで考えた世田谷の町をモチーフにしたデザインは、図書館の雰囲気と合っていて良かった。</li> <li>・子どもたちの世田谷の町への関心にもつながると思った。</li> <li>・子どもたちの気持ちになって、ビーズの量や机の配置などを決めることが出来た。</li> <li>・お店や電車を、各自、色紙で丁寧に作ることが出来たし、遠くから見ても分かる色使いでよかった。</li> <li>・子どもが雪の結晶の製作をしたくなるような本の選定が出来た。</li> </ul>
<p>〈改善点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材研究をするのが遅くて、準備がぎりぎりになってしまったり足りないものが出てきてしまったりした。</li> <li>・家でできること、学校でやらなければいけないことを前もってわけていなかった。</li> <li>・この日までに何を終わらすのか、だれが何をやるのかなど割り振りし、本番から逆算をして計画を立てるべきだった。</li> <li>・モール、毛糸、土台の大きさ、ビーズの種類など、すべての素材を丁寧に教材研究し、最終的にどの組み合わせがいいのか、もっと早くから考えるべきだった。</li> <li>・完成した子どもたちの作品を、何で貼るのか考えておくとよかった。(本番はガムテープ)</li> <li>・実際に壁面をやる窓や壁の長さをはかっておくべきだった。</li> </ul> <p>(数回の図書館訪問でやるべきことを決めておくとよかった。)(学生C)</p>

表3 製作活動についての振り返り

<p>製作活動の流れ自体はすごく良かったです。ただ思ったよりも沢山作っていて台紙が足りなくなりそうだったのでもっと枚数を増やしておけば良かったです。また、余った部分の毛糸をきる予定でしたが、残したいと言う子がいて、その場ではいいよと言いましたが、貼り付ける時にどうしようか気になりました。(学生A)</p>
<p>毛糸の色の種類と台紙の種類をたくさん用意していたおかげで、何個も作る子どもが飽きずに製作に取り組めたと思う。ビーズのほうについては、どこまでビーズをつけたらいいか印をつけておき、パーツの数が少ないものは最初から出さずにしまっておくべきだったと感じた。(学生B)</p>
<p>〈よかったところ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが言った言葉に対してしっかり反応しながら進められた。</li> <li>・雪の結晶づくりにつなげられるように、外が寒かった話や、雪の話をする事が出来た。</li> <li>・子どもたちがつくった雪の結晶をみて「キラキラでいいね」「上手にできたね」など達成感を感じることが出来る声掛けをすることが出来た。</li> <li>・子どもたちから「まだやりたい」「持って帰りたい」という言葉が出てきていた。</li> </ul>
<p>〈改善点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・待っている間に手遊びなどをして、子どもが退屈にならないようにするとよかった。</li> <li>・ずっと同じ机にいてしまって、違う机の子の作っている姿をあまり見る事ができなかった。</li> <li>・数に限りがあるビーズは前もって除いておくとよかった。</li> <li>・モールいっぱいビーズを付けてしまい、上手く切り込みにモールを差し込むことが出来なくなっていたので、前もってどのくらいビーズをつけたら素敵になるのか教えてあげたらよかった。(学生C)</li> </ul>

導入に用いた絵本の選書については、導入にするには話が長すぎるもの、読み手が関係構築できていない集団を相手にした読み聞かせには向かない、触って楽しむタイプのもの、大人数で読み手と離れて読むには小さすぎる・絵柄が細かすぎるものは避けるよう、具体例を挙げながら注意点を伝えた上で、学生に選ばせた。世田谷図書館での選書についての講義後初の実践場面とあって、学生達からは学んだことを生かしたいという強い思いがうかがえた。そして、各自が地元図書館に足を運ぶなどした上で、3名で話し合っ

て『きらきら』（文：谷川俊太郎、写真：吉田六郎、2008年、アリス館）に決めていた。当日は、子ども達が集中して聴いていたり、雪の結晶への関心を示したりする姿に、手応えを感じられたようであった（図2）。製作活動は、引率してくださった園の先生方のお力添えもあり、概ね計画していた通りに進めることができた。加藤（2018）によれば、学生は、壁面製作の際に子どもと一緒に活動することにより、学生のみでの活動では難しい、自身の活動を振り返ったり、子ども達との関わりを具体的にどう改善したらよいかを考えたりすることができるようになるという。今回の活動では、予想していなかった子どもの思い（ビーズをモールの端まで密に通したい／毛糸を長く垂らしたままにしたい等）への対応に苦慮する場面もあったものの、子ども達と実際に活動ができたからこそ、幼児理解の機会に恵まれたともいえ、学生達には、反省を次の実践につなげて行こうとする姿が見られた（図3、図4）。



図2 読み聞かせの様子

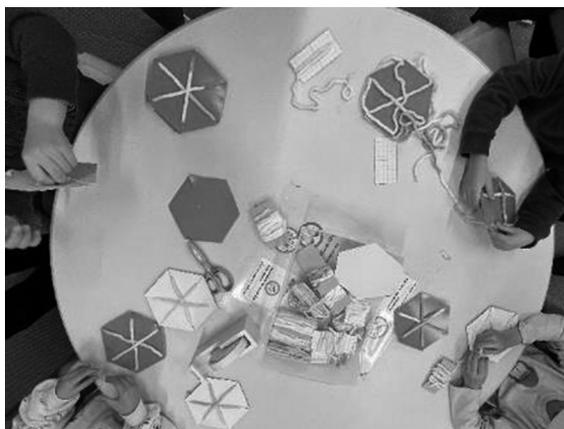


図3 製作の様子



図4 飾りつけ後の様子

### 3.3 読み聞かせ行事への協力参加と区民ボランティアとの交流

学生は、事前（9月26日）に定例おはなし会の参観をし、全体の流れや会の雰囲気を知った上で、12月15日（金）の実習体験、あかちゃんへのおはなし会の準備を進めてきた。以下は、活動の終了後、学生達に、1. ビッグブック『わんわんわんわん』の選書理由と絵本としての魅力（表4）、および、2. 読み聞かせについて、よかったところと改善点（表5）、3. 手遊び『りんごごろごろ』について、よかったところと改善点（表6）、4. その他の感想（表7）をそれぞれ書くよう求め、提出された振り返りの内容を表にまとめたものである。



図5 大型絵本の読み聞かせの様子



図6 親子でできる手遊びをする様子

表4 選書理由と絵本としての魅力

<p>鳴き声だけと音だけを楽しむ絵本なので0, 1歳のまだ物語などの絵本が難しい時期に読むには楽しめる絵本だと思い選書しました。赤ちゃんの絵本として音や単純な絵をすきなように楽しめるという良さがあるとも感じました。（学生A）</p>
<p>動物の名前ではなく鳴き声を扱った絵本で0, 1歳児が興味を持てるから。 繰り返しの文章で文字の大きさによる声の強弱、複数の動物の登場で楽しめる。（学生B）</p>
<p>選んだ理由は、色々な動物と鳴き声が繰り返し描いてあり、目で見ても耳で聞いても楽しめると思ったからです。『わんわんわんわん』の絵本の魅力は、シンプルだけど鳴き声と動物の場所が対象になっていたり、文字の大きさが微妙に違っていたり、読み手の工夫できるところがたくさんあるところだと思いました。また、鳴き声の似ていない動物が出てくることで色々な鳴き声を赤ちゃんが音で楽しむことができるところと、はっきりしたシンプルな絵だからこそ、色でも楽しむことができるところだと思いました。（学生C）</p>

赤ちゃんへのおはなし会では、『大型絵本わんわんわんわん』（高島 純／2020年／理論社）の読み聞かせと、『りんごごろごろ』の手遊びを行った。『大型絵本わんわんわんわん』には、読みきかせ用テキストが付いてきたが、取ってそちらは見ずに、教材研究に臨んだ（表4）。赤ちゃん絵本によくみられるオノマトペの繰り返しは、いざ、読むとなると難しかったようで、練習では、最初の「わんわん」の言い方から、早速、議論になった。ポイントサイズ、拗音の扱い、文字のレイアウト、そこに込められた作者の思いについて考察し、お話を聞く赤ちゃんの反応を予想しながら読み方を考えるなかで、多様な教材解釈や、その人の声だからこそその味わい深さがでることに気付けた点は、学生達にとって大きな収穫となった（図5）。研究室内オーディションでは、三者三様の読み方が見られ、互選で1位となった学生が本番の役目を勝ち取った。このようなプロセスを経て本番を迎えたことで、動画のように繰り返し一方通行で再生するのではなく、赤ちゃんの反応を見ながら、ページをめくるスピードを調節したり、アイコンタクトを取りながら語り掛けたりできる、対面での活動の魅力を体感できた様子だった（表4、表5）。

表5 読み聞かせについての振り返り

<p>ページを送るタイミングを赤ちゃんの反応と合わせながら行うことができました。突然興味をもって見たり、聞いたり、聞かなかったりと自由に動く子どもたちにどう反応していいのか探り探りでしたが、物語をしっかり追っているわけではないので、しっかりと反応してもいいなと途中で感じて、子どもとの関わりや反応も大切にしながら読み聞かせを行いました。また、ぞうの出るところのページの送り方をもっといい方法はないかなと考えたいと思いました。少しずつ送ってページの端を見せてから送りましたが、読むタイミングも含めてどう読むのが子どもの興味をひきつけるのかなと思いました。（学生A）</p>
<p>読む際に本を見るのではなく、子どもの目を見たり、身振り手振りをつけたりしたら、子どもは飽きなかったのではないかと感じた。</p> <p>ゾウが出てくるページの捲り方の工夫はとてもよかったと思った。（学生B）</p>
<p>よかったところは、赤ちゃんの反応を見ながら読むことができたところと、それぞれの動物の鳴き声の特徴を掴んで読むことができたところです。</p> <p>練習で青木先生に教えてもらった通り、表紙が反射しないように気をつけられたところも良かったです。</p> <p>改善点は、声の大きさや響きが足りなかったところです。ボランティアの方のように、おはなしのへや全体に響く声だったり、ただ大きいだけじゃなくてメリハリをつけて読めたりしたら、もっと赤ちゃんが興味を示してくれると思いました。（学生C）</p>

表6 手遊びについての振り返り

<p>とにかく一緒に動いて（動かして）できることが一緒に楽しめて良かったです。とくにキャベツのところがかわいかったです。絵カードはかなり子どもの食いつきが良かったので、やはりはっきり目に見えるものがあるといいなと思いました。3回やるなかで1回目2回目とつなぎの間の言葉かけがどういったらいいかわからなくて、なんとなくで話してしまったので、もう少し子どもの様子を拾いながら保護者の方にも語り掛けながらできたらよかったなと思いました。（学生A）</p>
<p>果物と擬音、簡単な動きを取り入れた手遊びで、お母さんと一緒に楽しめるところがよかった。</p> <p>改善点は歌のテンポが少し早かった感じがしたので、もう少しゆっくり歌ってもよかったと思った。（学生B）</p>
<p>よかったところは、歌詞の絵カードを大きくはっきりとした色で作ったことによって、お母さんお父さんたちにも歌詞が分かりやすく伝わったことや、赤ちゃんが絵カードを見て興味を示してくれたところです。</p> <p>改善点は、参加者とのコミュニケーションが足りなかったところです。親子で楽しく出来る手遊びだからこそ、始める前に「お子さんと一緒にできる手遊びなので、ぜひお膝にのせて一緒にやってみましょう。」「最初に自分たちだけでやるので真似しながら口ずさんでみてくださいね。」など、発表会ではないので、その場その場で参加者とコミュニケーションをとってできたら良かったなと思いました。（学生C）</p>

表7 その他の感想

<p>雪だるまのパペットや絵カードのようにものがあると子どもがものすごく食いついていたので、パペットを使ってお話するのも面白そうだなと思いました。また、リズムよく読むと私も集中して聞けたので、文章の読み方を工夫することも興味をもってもらえる要因の一つだなと思いました。加えて、絵本の文章をアレンジして読んでいたのでそこも研究して読み聞かせしていかないといけないと思いました。（学生A）</p>
<p>0, 1歳と初めて接して見て関わり方が難しかった。</p> <p>話しかけ方や人見知りしないかなど。（学生B）</p>
<p>今回、赤ちゃんの読み聞かせの会をやってみて、園児とはまた違う反応を見ることができて、とても勉強になりました。さらに、お母さんやお父さんも一緒に参加する会だったので、赤ちゃんだけでなく参加者のことも考えながら構成を考えることもいい経験になりました。お話しのお会もまたぜひやりたいです。</p> <p>製作や読み聞かせの経験ができたので、今後は園児などと音楽に合わせてながら体を使うリトミック的な活動と一緒にできたらいいなと思いました。（学生C）</p>

『りんごごろごろ』の手遊びは、赤ちゃんや保護者に歌詞を覚えてもらいやすいよう、大きなパネルを作

るというアイデアが学生から出てきた(図6)。リハーサルを重ねるなかで、パネルの出し方を工夫したり、自身の顔も舞台であることを意識したりすることができるようになった点は、具体的な相手を想定しながら準備を行った効果が大きいと考えられる(表7)。また、当日の打ち合わせでは、ボランティアの方から、手遊びは赤ちゃんの心拍数に合わせてゆったりとしたテンポで行うとよい旨をご助言いただき、普段行っている幼児向けの手遊びとの違いについても知ることができた。長年、ボランティアをされてきた方の技から学ぶことも多く、特に、パペットを使ったおはなしなどは、難しそうだけれども、見ていた自分達が楽しかったので、いつか挑戦してみたいと、保育技術を磨いていこうとする意欲につながったようである(表7)。事前打ち合わせの段階から、何をしても合わせるから大丈夫、と学生を快く受け入れてくださったボランティアの方との交流経験は、学生が教員となった時に、地域の人材マップを作成する際にも役立つことだろう。

また、当日、図書館職員の提案で子ども達と壁面のアレンジをしたことを機に、学生達は保護者と話すことができ、活動に関心をもっていただけたり、褒めていただけたりしたことが、励みとなった様子だった。

#### 4. 総合的考察

本事業の一番の成果は、初等教育の教員を目指す学生が、幼児や児童の生活に関係の深い公立図書館の使命について知り、子ども達が繰り返し関わりたくくなるような各種おはなし会の企画や、「おはなしのへや」の環境構成について、実践的に学ぶ機会を得られた点にある。また、図書館が地域のつながりづくりを促す取り組みをし、伝統ある読み聞かせのボランティアスタッフや、子ども読書リーダーといった地域住民が活躍する場となっていることを知ることができたことは、公共施設としての図書館の教材研究にもつながった。

選書の学習を通じた図書館員と学生との意見交換では、図書館の内容別蔵書構成について学んだことで、教員となった際に、学校園の図書の世界整備に必要な視点をもつことができた。そして、選書に際しては、専門家である司書との連携も重要であることに気付くことができた。

幼児との「おはなしのへや」の壁面製作活動では、おはなしの世界と図書館とをつなぐような空間にしたいという意図が園児に伝わり、共に作品を作り上げることができたことにやりがいを感じていた。それにより、子どもが楽しんで活動に取り組めるように援助するという教育の原点に立ち返ることができた。

読み聞かせ行事への協力参加と区民ボランティアとの交流では、子どもたちや保護者との交流を通じて活動への手応えを感じられることが、次の活動への動機づけを高めることが確認された。また、経験豊富なボランティアから読み聞かせの技術を学んだことが、自己研鑽への意欲につながることを示された。

最後に、今後の課題について述べる。公共図書館が地域みんなの物であることを踏まえると、「おはなしのへや」の壁面製作については、学生との交流活動に参加してくれた子ども達だけでなく、後日、ふらりと訪れた子どもも作品を加えていき「おはなしのへや」を自分達の居場所のように感じられるようにしていくことが望ましいだろう。現時点では、図書館員の方がアレンジを加えてくださっているが、いずれはこの点についても図書館員との意見交流を行いながら、学生が見通しをもって計画していけるようにしたい。

#### 引用文献

- 幡野由理・山根直人・小田倉 泉(2009) 保育環境における壁面装飾の意義 1: 幼稚園教員・保育士への質問紙調査から 埼玉大学紀要教育学部, 58(2), 171-181.
- 加藤 望(2018) 子ども主体の考え方にに基づく環境構成指導の試み: 壁面構成作成に関する学生指導の実践的研究 愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇(愛知淑徳大学福祉貢献学部論集編集委員会), (8), 56-62.
- 文部科学省(2018a) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 生活編 平成29年7月 東洋館出版.

文部科学省（2018b）幼稚園教育要領解説 平成30年3月 フレーベル館.

長倉美恵子・永田治樹・日本図書館協会国際交流事業委員会（訳）（2025）IFLA-UNESCO 公共図書館宣言2022  
<https://repository.ifla.org/rest/api/core/bitstreams/d83848e9-0637-4ab6-a868-443ed044da3f/content>（2025年12月4日アクセス）

八幡真由美（2025）子どもの本環境に関する研究：公共図書館におけるインタビュー調査を中心に 研究紀要（国立音楽大学）,59,127-137.

## 謝辞

地域の皆様との交流と学びの機会を与えてくださった世田谷区、並びに世田谷区立世田谷図書館の皆様  
に厚く御礼申し上げます。また、グローバルキッズ世田谷四丁目園の皆様、地域ボランティアの皆様、赤ちゃん  
へのおはなし会にご参加くださった皆様に深く感謝いたします。